士進み出て甲を脱ぎ弓弦をはずし、降人になるは昔より弓箭の法也。具足甲を敵に渡す法は珍敷事なり。是非具足が欲しくば、大将に渡さんとて、近江守に投掛て腹かき破り失せたりき。

資料(二)

佐伯惟治

「豊後遺事」（加藤賢成）による

大友到明公（大友宗麟の文義鑑）ノ時、梅牟礼城主佐伯惟治ノ謀叛ヲ讒スル者アリ。公、臼杵長景ニ命ジテ之ヲ討セシム。

梅牟礼城固ヨリ険ニ、士卒亦勇ナリ。長景屢攻ムレドモ勝タズ。因テ人ヲシテ惟治ニ言ハシメテ曰ク、此戦ヤ私憾アレニ非ズ。タダ公命ヲ以テノ故ノミ。子暫ク去テ日州ニ遁レバ、我レ子ノ為メニ其ノ冤ヲ白セン。

惟治之レニ従ヒ、城ヲ委シ、去テ日州三河内ニ至ル。長景密ニ近傍ノ諸氏ニ諭シ、之ヲ要撃ス。従士野々下右馬亟、餅原監物等拒ギ戦フ。惟治間ヲ得テ自殺ス。時ニ大永七年十一月二十五日ナリ。

其後、惟治ノ霊、崇リヲナス。土人祠ヲ立テ富尾神ト称シ、歳時祭祀ス。

(付) 梅牟礼城（唐橋世済「豊後国志」による）

佐伯荘古市村ニ在リ。山険ニシテ草樹叢茂シ、山上畧平ニシテ要固ノ地ナリ。

大永中、佐伯薩摩守之ニ拠ルモ、今ハ廃ス。

資料(三)

梅城　明石秋室

妖狐青冢前頭嘯
怪鵬黒松深裏棲
蘚蘿未縛一翁仲
沙上蝕餘幾蒺藜
千年古墨雲旗出
半夜陰風鬼馬嘶
英魂叱咤衆魂起
挟得秋声作鼓聲

（妖狐青冢の前頭に嘯き、怪鵬黒松の深裏に棲む。蘚蘿未縛す一翁仲、沙上蝕餘す幾蒺藜。千年の古墨に雲旗出で、半夜の陰風に鬼馬嘶く。英魂叱咤して衆魂起ち、挟み得たる秋声鼓聲を作す。）

梅嶺　秋月橘門

臨風長嘯恨依々
千古英雄一夢非
荒墨棲狐埋乱艸
残碑戴鶻立斜暉
或伝寃血夜深後
凝作寒燐雨裡飛
壮士何堪慷慨切
野花折取祭墳帰

（臨風長く嘯いて恨み依々。千古の英雄一夢に非ず。荒墨に狐棲んで乱艸埋まり、残碑鶻を戴いて斜暉に立つ。或いは伝う寃血夜深き後、凝って寒燐を作し雨裡を飛ぶ。壮士何ぞ堪えん慷慨の切なるに、野花を折り取って墳を祭って帰る。）

梅牟礼登山　案内承ります。
三、四人まとまれば、ご都合よい日時に一しょに登ります。
午前中、または午後半日で可、水会事務所まで、電話でどうぞ。